

前例のない感染症パンデミックへの恐怖 ～COVID-19患者の院内感染隔離解除ルールの設定で経験した困難～

2019年末、新興感染症として出現した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は瞬く間に全世界に拡散した。各医療機関の感染対策責任者は、目まぐるしく変化する情報・エビデンスに基づいて、それぞれの医療機関で感染対策ルールを整備してきた。相手は目に見えないウイルスであり、陽性者・疑似症例に対する隔離および感染対策の導入に比べて、院内隔離解除ルールを設定することは様々な意見が飛び交いコンフリクトが生じるものである。パンデミック当初、岡山大学病院でも独自の院内隔離解除ルールを設定したが、職員の感染に対する不安が払拭できず、実際の隔離解除に至らない時期があった。本論文では、我々が経験した感染隔離解除を巡る困難について、アンケート形式で回収した意見を踏まえて報告した。

当院職員のうち150名（22.7%は隔離病棟で勤務経験あり、51.3%は隔離病棟で勤務経験なし、26%は無回答）から回答を得た。院内隔離解除ルールの必要性について、約8割は必要であると回答した一方で、約6割は隔離解除ルールを満たしたとしても一般病棟でケアすることには不安があると回答した。また、隔離解除ルールがないことで困った経験があると回答したのは、隔離病棟勤務者では約半数だった一方で、隔離病棟以外での勤務者では約1/5に過ぎなかった（下表）。

本アンケート調査によって、隔離解除を巡っては潜在的な感染への不安が存在し、それを踏まえた隔離解除ルール決定の必要性が示唆された。また、当時、職員の多くは隔離病棟での勤務者ではなく、隔離解除ルールの設定に対する院内での意識の違いが影響したと考えられた。

	Yes, I am in trouble (N = 42)	No, I am not in any trouble at all (N = 108)	<i>p</i>
Working in COVID-19 ward	20 (47.6%)	14 (13.0%)	<0.001
Not working in COVID-19 ward	8 (19.0%)	69 (63.9%)	
No response	14 (33.3%)	25 (23.1%)	

Fear of an unprecedented, invisible enemy: Difficulties experienced in establishing criteria for the release of COVID-19 patients from isolation in a Japanese University Hospital.

Hagiya H, Hasegawa K, Otsuka F. PLoS One. 2022 Apr 14;17(4):e0266853.

